ドイツ語における形容詞の弱変化語尾“-e/-en”及び指示／関係代名詞の拡張語尾“-en”について―その意味するもの

行重　耕平

０．序

ドイツ語の形容詞には弱変化と呼ばれる語形変化があり，現代ドイツ語や中高ドイツ語では，語尾“-e”と“-en”を性数格に応じて区別するのみという非常に単純な構図を取る。初級文法で必ず扱われる現象であるが，あまりの単純さゆえに全く無意味な区別であると感じられざるをえず，却って学習者を混乱させてしまうことになりがちである。一方，指示／関係代名詞の中に基本的な語形が定冠詞と同じものが存在するが，現代ドイツ語においては，指示／関係代名詞の一部の性数格で“-en”が余分に付加される。この指示／関係代名詞の“-en”の分布は形容詞の弱変化のそれと完全に一致するわけではないが，やはり無意味なものとされるのが常である。

本論は，上記の単純な区別に何らかの意味を見いだそうとする試みである。形容詞弱変化の機能が明らかになると，一見無関係に思える指示／関係代名詞の拡張語尾“-en”の機能も同様のものであるといえるようになる。それに伴い，形容詞弱変化と指示／関係代名詞とで語尾の分布が異なっている理由も明らかになる。

１．現代ドイツ語における形容詞の弱変化

現代ドイツ語（新高地ドイツ語（新高ドイツ語））(Neuhochdeutsch(Nhd.)) における形容詞の弱変化は，定冠詞あるいはそれに類する限定詞 (determiner) とともに名詞に付加される場合に現れ，性数格に応じて“-e”または“-en”のいずれかの語尾を取る。

（１）[1)]

	sg./m.	**sg./f.**	**sg./n.**	**pl.**
nom.	der gut***e*** Kaffee	die gut***e*** Milch	das gut***e*** Bier	die gut***en*** Leute
acc.	den gut***en*** Kaffee	die gut***e*** Milch	das gut***e*** Bier	die gut***en*** Leute
dat.	dem gut***en*** Kaffee	der gut***en*** Milch	dem gut***en*** Bier	den gut***en*** Leuten
gen.	des gut***en*** Kaffees	der gut***en*** Milch	des gut***en*** Bieres	der gut***en*** Leute
	“the good coffee”	“the good milk”	“the good beer”	“the good people”

語尾だけを取り出すと，次のようになっている。

（２）(Nhd.)

	sg./m.	sg./f.	sg./n.	pl.
nom.	***e***	***e***	***e***	***en***
acc.	***en***	***e***	***e***	***en***
dat.	***en***	***en***	***en***	***en***
gen.	***en***	***en***	***en***	***en***

形容詞の弱変化には元来“限定”の意味を表す機能があったため，定冠詞との共起につながったといわれるが，その機能は早くに失われ，また格表示機能の消失により，その存在はほとんど無意味な単なる歴史的変遷による副産物であるかのようにいわれる。せいぜい付加される名詞との結びつきを明示する「シンタグマ表示 (syntagma marking)」の働きが指摘されている程度である。（清水 2012: 40, 42ff., 50f.）

（３）

a. Der Kaffee ist **gut**. “The coffee is good.”

b. Sie trinkt den **gut*en*** Kaffee. “She drinks the good coffee.”

しかし，シンタグマ表示機能だけであれば，“-e”と“-en”との区別は必要はなく短期間でどちらかに統合してしまいそうであるが，弱変化におけるこの２項対立は現代ドイツ語の前身である中期高地ドイツ語（中高ドイツ語）(Mittelhochdeutsch(Mhd.))（11 ～ 14 世紀頃）の段階で既に存在しており，かなりの長期にわたって保持され続けているのである。[2] やはり，この区別は別の何らかの機能を担っているのではなかろうか。

そこで（２）を眺めてみると，複数 (plural) においては常に“-en”が現れ，“-e”は単数 (singular) においてしか現れないことが分かる。また，単数においては，主格 (nominatve) は常に“-e”，与格 (dative) と属格 (genitive) は常に“-en”であり，対格 (accusative) においてのみ“-e”と“-en”の両方が現れる。

ここで大雑把に単数の特徴を“-e”，複数のそれを“-en”と考えると，複数形には単数形にはない標識（ここでは“n”）が存在するというごくありふれた現象 (e.g. car *vs.* cars) として捉えることができる。これは，内容と形式には相関性があるという類像性 (iconicity)(e.g. Van Langendonck 2007) に基づいた現象であると考えられ，“より多”を表す複数形の方が単数形よりも複雑な構造を持つのである。[3]

では，単数において，“-e”だけではなく“-en”も現れることをどのように考えればよいのであろうか。（２）の表では，より下に表記した格ほど“-en”が現れやすくなるように見える。類型論的に見ると，格には階層性があり，下位の格が存在すれば上位の格も存在する傾向にあるが，その逆は必ずしも成り立たない。Primus(2011: 308) には次のような階層が示されている。

（4）

nominative/absolutive > accusative/ergative > dative > other oblique cases

少し砕けた言い方をすると，階層の左側はありふれた格であり，右に行くほど特殊な格ということになるが，これは有標性 (markedness) の違いとして捉えることができる。大まかにいうと，有標とは“複雑”，“特殊”，“例外的”，“不規則”，“不自然”といったこと意味し，その反対の無標とは“単純”，“一般”，“普通”，“規則的”，“自然”といったこと意味する。すると，右に行くほど有標性が高く（有標 (marked)），左に行くほど有標性が低く（無標 (unmarked)）なるということである。結局ドイツ語の格階層は（5）のようになり，有標性の高い格ほど“-en”が現れやすいといえる。

（5）ドイツ語における格の有標性階層[4)]

nominative > accusative > dative > genitive

さて，有標性の観点から数を見ると，単数が無標，複数が有標であるので，結局有標性の高い場合に“-en”が，すなわち複雑な構造が現れやすくなるといえそうである。つまり，類像性とは（内容の）“有標性”と形式との相関性であると考えることができる。[5)] すると，もう1つの基準である性に関する有標性はどうなっているのであろうか。

ドイツ語では, 人を表す疑問代名詞 (wer(= who)) や不定代名詞 (jemand(= someone), einer(= one), etc.) は男性である。一方，中性名詞は多くのロマンス諸語には存在しない。このことから，男性が最も無標的，中性が最も有標的であると考えられそうである。

（6）ドイツ語における性の有標性階層

masculine > feminine > neuter

実際 Rice(2006) も，同様の階層に基づいて，ドイツ語の名詞について，その性を示す形態的あるいは意味的な特徴が存在しない場合には男性，女性と中性両方の特徴が存在する場合には女性となることを示している。ところが，有標性と類像性とが相関するのであれば，“-en”の出現が男性では少なく女性や中性では多くなるはずであるが，実際には逆である。性と上で見た数や格との違いは，前者が半ば恣意的に名詞を分類する役割しか果たしておらず, その内容は乏しいということである。それに対し, 数は意味内容の一種であり, また, 格は文中における名詞句の文法役割を示し意味解釈に直接影響する。類像性は本来“内容”との相関であるので，“-e”か“-en”の選択基準である性数格のうち，性だけが異なった振る舞いをすることは十分に考えられる。では，性はこの問題にどのように関与しているのであろうか。

性の観点から見ると，有標的な状況では“-e”の方が優勢である。一方，有標性とは幅広い概念で[6)]，“-e”は無標的な，“-en”は有標的な構造であるといえる。つまりここでは，有

標的な状況を減少させようという意識が働いているものと思われる。“有標”には“複雑”，“不自然”といった否定的な意味合いがあることから考えれば，当然の成り行きであると思われる。[7)]

以上のように，現代ドイツ語における形容詞の弱変化語尾は性数格に関する総合的な有標性を具現化していると考えられる。

２．最適性理論による分析

この節では，前節で見た形容詞の弱変化における有標性と類像性の働きを明確にするために，最適性理論 (Optimality Theory)(Prince & Smolensky 1993, Kager 1999, その他) の枠組みを用いて分析を行う。最適性理論は，優先順位のある違反可能な一連の制約 (constraint) によって現象を説明しようとするものである。制約は互いに矛盾する場合があり，そのような場合には上位の制約が守られ，下位の制約は破られる。実際の分析においてその妥当性を高めるためには，制約は十分に動機づけられた普遍的なものであることが望ましい。言語間の差異は，“普遍的な制約”の“異なった優先順位”によって生じるとするのが最適性理論の基本理念である。

まず，上で見た性数格に関する有標性は，次のような制約と優先順位によって表すことができる。

（７）**数の有標性**

*plural >> *singular (*pl >> *sg)

（８）**格の有標性**

*genitive >> *dative >> *accusative >> *nominative (*gen >> *dat >> *acc >> *nom)

（９）**性の有標性**

*neuter >> *feminine >> *masculine (*n >> *f >> *m)

***X** は，X の実現を禁止する制約で，X の有標性が高いほど *X の優先順位は上位になる。そのため前節で見た有標性階層とは逆順になる。*X の優先順位が上位であるほど X の実現はより厳しく制限されることになり，より有標であるということが表現されるのである。ただ，上に挙げた制約は互いに矛盾してはいないので，これだけでは性数格は表面上全く存在しないことになってしまう。当然，性数格の実現を要求する何らかの制約がさらに上位に存在していると考えなければならない。これは基底の要素を表層においても保持しなければならないという忠実性制約 (faithfulness constraint) の一種であると考えられ，本論では，この制約の存在は自明のものとして分析を行う。もし，例えば，（９）の階層の *neuter と *feminine の間にこの忠実性制約が位置していれば，中性は存在しないことになるが，これが正にロマンス諸語の状況であると考えられる。

次に，類像性に関して次の制約を設定する。

（10）

ICONICITY (ICON)「**（内容に関する）有標性は構造に反映されなければならない**」

有標性は一般に，

（11）

*marked >> *unmarked

という図式で表すことができ，また，類像性は有標性の高さを反映するので，

（12）

ICONICITY & *marked >> ICONICITY & *unmarked

のような結合制約とその優先順位を考えることができる。このように制約どうしを結合して新たな制約を導き出すことは局所結合 (Local Conjunction) と呼ばれ (Smolensky 1993: 8, 1995: 4, Kager 1999: 392ff., その他)，一定の領域 (domain) 内で構成制約がすべて破られた場合にのみ全体としての違反となる。性数格は名詞句全体の問題であるが, 本論で扱う “語尾” は語内部の問題であるので，（12）の適用領域は “語 (word)” であると考えておく。結合制約は，その要素である個々の制約より上位に位置付けられることで意味を持つ。

（13）

a. ICONICITY & *marked >> ICONICITY, *marked

b. ICONICITY & *unmarked >> ICONICITY, *unmarked

同時に複数の制約に違反することは，個別の違反よりも重大であることは容易に察しが付くであろう。（12）によって，より有標的な状況で類像性がより実現しやすくなるといえるようになる。

（12）の図式と（７）,（８）より, 次のような結合制約と優先順位を導き出すことができる。

（14）

ICON & *pl >> ICON & *sg

（15）

ICON & *gen >> ICON & *dat >> ICON & *acc >> ICON & *nom

さらに，同一の格であっても単数と複数とで語尾が異なっている場合もあるため，次のような３つの制約の結合[8]とそれらの優先順位を考えることができる。

(16)

a. ICON & *pl & *gen >> ICON & *sg & *gen
b. ICON & *pl & *dat >> ICON & *sg & *dat
c. ICON & *pl & *acc >> ICON & *sg & *acc
d. ICON & *pl & *nom >> ICON & *sg & *nom

(17)

a. ICON & *pl & *gen >> ICON & *pl & *dat >> ICON & *pl & *acc >> ICON & *pl & *nom
b. ICON & *sg & *gen >> ICON & *sg & *dat >> ICON & *sg & *acc >> ICON & *sg & *nom

(16）と（17）に含まれている制約は同一であるが，前者は数を，後者は格を基準に優先順位を示したものである。いずれにしろ，すべての制約に関してその順位を完全に確定することは不可能である。

ところで，ICONICITY は，（７）～（８）の制約と同様，単独では実際の有標性の高さに関わりなく，すべての対象に適用されてしまう。ICONICITY を無効にするような制約が存在しなければ，正しく現象を捉えることはできない。この役割を果たすものとして，構造そのものを禁止する制約が存在するものと考えられる。

(18)

*STRUCTURE (*STRUC)「**構造は存在してはならない**」

無制限に語形を複雑化することは，効率性の観点から望ましいことであるとはいえない。*STRUCTURE の存在もそれなりに根拠があるのである。[9]

さて，残りは性の有標性であるが，性の有標性は構造の有標性を嫌うことから，*STRUCTURE と組み合わせることで，次のような結合制約と優先順位を導き出すことができる。[10]

(19)

*STRUC & *n >> *STRUC & *f >> *STRUC & *m

ただ，複数において性の区別が存在しないため，(19）の制約は，(17)a の一連の制約と矛盾することはない。(17)a と矛盾するのは，(18)で示した単独の *STRUCTURE である。そして，複数においては格に関わりなく“-en”が現れるため，次のような優先順位を想定することができる。

(20)

ICON & *pl & *gen >> ICON & *pl & *dat >> ICON & *pl & *acc >> ICON & *pl & *nom >> *STRUC

結局（19）は，単数に関してのみ意味を持ち，(17)b に次のように埋め込むことができる。

(21)

ICON & *sg & *gen >> ICON & *sg & *dat >> *STRUC & *n >> *STRUC & *f >> ICON & *sg & *acc >> *STRUC & *m >> ICON & *sg & *nom

さらに，（20）と（21）で示された優先順位は，（13）より *STRUC & *m >> *STRUC となることや（16）とも整合する。

最後に（20）と（21）をいくつかの場合に適用した例を表の形で示す。[11), 12)] “*” は上段に記された制約に対する違反を表し，“!” の付与された違反により他の候補より不適格と判断される。

(22)

sg./m./acc.	ICON & *sg & *acc	*STRUC & *m	*STRUC	*m	ICON	*sg	*acc
a. *e*	*!			*	*	*	*
b. ☞ *en*		*	*	*		*	*

(23)

sg./f./acc.	*STRUC & *f	ICON & *sg & *acc	*STRUC	*f	ICON	*sg	*acc
a. ☞ *e*		*		*	*	*	*
b. *en*	*!		*	*		*	*

(24)

pl./nom.	ICON & *pl & *nom	*STRUC	ICON	*pl	*nom
a. *e*	*!		*	*	*
b. ☞ *en*		*		*	*

以上見てきたように，一見無意味に思える形容詞の弱変化語尾“-e”と“-en”の分布は，言語理論的に明確に把握可能である。中高ドイツ語の段階より長期にわたって保持され続けているこの区別は，単なる歴史的変遷による副産物ではなく，抽象化されてはいるが，人間の認知機能のれっきとした反映であると考えられる。[13)]

３．中高ドイツ語における形容詞の弱変化

形容詞の弱変化における“-e”と“-en”の区別は，既に中期高地ドイツ語（中高ドイツ語）(Mittelhochdeutsch(Mhd.))（11 ～ 14 世紀頃）の段階で見られる。この段階で既に上で見たような性数格に関する総合的な有標性を具現する機能があったと考えられる。ただ，女性単数対格において，現代ドイツ語 (Nhd.) の“-e”に対し，中高ドイツ語では“-en”が現れることが唯一の相違である。

（25）(Mhd.)

	sg./m.	**sg./f.**	**sg./n.**	**pl.**
nom	***e***	***e***	***e***	***en***
acc.	***en***	***en***	***e***	***en***
dat.	***en***	***en***	***en***	***en***
gen.	***en***	***en***	***en***	***en***

この相違は，現代ドイツ語における制約の優先順位（26）が，中高ドイツ語では，（27）のようになっていたと考えることで把握することができる。

（26）（＝（21））(Nhd.)

ICON & *sg & *gen >> ICON & *sg & *dat >> *STRUC & *n >> *STRUC & *f >>
ICON & *sg & *acc >> *STRUC & *m >> ICON & *sg & *nom

（27）(Mhd.) [14)]

ICON & *sg & *gen >> ICON & *sg & *dat >> *STRUC & *n >> <u>ICON & *sg & *acc >> *STRUC & *f</u> >> *STRUC & *m >> ICON & *sg & *nom

（28）

sg./f./acc. (Mhd.)	ICON & *sg & *acc	*STRUC & *f	*STRUC	*f	ICON	*sg	*acc
a. *e*	*!			*	*	*	*
b. ☞ *en*		*	*	*		*	*

制約とその優先順位という観点から見ると，現代ドイツ語と中高ドイツ語との差異は，（27）で下線を施した ICON & *sg & *acc と *STRUC & *f との順位の入れ替わりによるものであるといえる。制約そのもの及びその相互作用に関しては全く差異はなく，中高ドイツ語における形容詞の弱変化も現代ドイツ語のそれと全く同じ機能を担っていたといえるのである。さらに，（29）に示した優先順位は固定していると考えられるので，中高ドイツ語から現代ドイツ語への移行に際し，対格について，女性単数ではなく男性単数のみが“-e”になることはありえなかったことになる。

(29)

a. ICON & *sg & *gen >> ICON & *sg & *dat >> ICON & *sg & *acc >> ICON & *sg & *nom (＝ (17)b)

b. *STRUC & *n >> *STRUC & *f >> *STRUC & *m (＝ (19))

もし，男性単数対格で“-e”が現れるとすると，*STRUC & *f >> *STRUC & *m >> ICON & *sg & *acc という順位にならざるをえず, 女性単数対格でも“-e”となるはずである。また, (27) から（26）への移行は, ICON & *sg & *acc と *STRUC & *f との単純な入れ替えであるが, (27) から男性単数対格で“-e”が現れるような順位を導こうとすると，*STRUC & *f と *STRUC & *m を同時に ICON & *sg & *acc の上位に移動させなければならない。当然単純な順位の入れ替えの方が容易に起こりえると考えられ，中高ドイツ語から現代ドイツ語への変遷に際して，対格でまず影響を受けるのは，必然的に男性ではなく女性であるということになるのである。

以上のように，制約とその優先順位による分析は，中高ドイツ語の形容詞の弱変化についても現代ドイツ語の場合と同様の機能を有することを示すものである。さらに，中高ドイツ語から現代ドイツ語への変遷において，男性ではなく女性の方に変移が起こったこともある意味必然であることも示すことができる。そしてこれは，形容詞の弱変化にはそれなりの機能が備わっているという見解をより強化することにもなる。

４．現代ドイツ語の指示／関係代名詞における“-en”

ドイツ語の指示／関係代名詞 (demonstrative/relative pronoun) の中に，基本的な語形が定冠詞 (definite article) と同じものがある。定冠詞は起源的に指示代名詞であることからこれは当然のことであるが，現代ドイツ語では，指示／関係代名詞の属格及び複数与格において“-en”による拡張が行われる。

(30) 指示／関係代名詞 (Nhd.)

	sg./m.	**sg./f.**	**sg./n.**	**pl.**
nom.	der	die	das	die
acc.	den	die	das	die
dat.	dem	der	dem	den***en***
gen.	dess***en***	der***en***	dess***en***	der***en***

(31) 定冠詞 (Nhd.)

	sg./m.	**sg./f.**	**sg./n.**	**pl.**
nom.	der	die	das	die
acc.	den	die	das	die
dat.	dem	der	dem	den
gen.	des	der	des	der

（30）を見ると，名詞に付加できる属格で主に現れることから，指示／関係代名詞の“-en”は 1 で指摘したシンタグマ表示機能を担っているとも考えられる。しかし，複数与格でも“-en”が現れるため，やはりこの場合にも形容詞の弱変化と同じように，性数格に関する総合的な有標性を具現する機能が存在していると思われる。ただ，形容詞の弱変化の場合と異なり，対立は“-e”対“-en”ではなく，“-∅”対“-en”である。当然，形容詞の“-e”と指示／関係代名詞の“-∅”とが同等であると考えられるが，後者で何も現れないのは，代名詞には属格を除き付加語的な機能はなく，シンタグマ表示をする必要がないためであろう。では，形容詞の弱変化より“-en”の出現範囲が狭くなっているのはどういうことなのであろうか。

形容詞と代名詞の相違はその内容的有標性にあると思われる。形容詞にはそれぞれに固有の意味内容が存在しているのに対し，代名詞は意味的に希薄で，その内容は文脈によって決まるものである。よって，形容詞は代名詞よりも内容的に有標であると考えられる。また冠詞は，名詞の付属物としてしか存在しえないので，内容的にはさらに希薄で代名詞よりもさらに無標的であると考えられる。

（32）

*adjective >> *pronoun >> *article (*adj >> *pron >> *art)

それで，類像性に関してはこの順序で反映され難くなるのはごく自然なことであろう。

（33）

ICON & *adj >> ICON & *pron >> ICON & *art

指示／関係代名詞を考慮すると，形容詞の弱変化を把握するために設定した制約とその優先順位（34）は，厳密には（35）のようになると考えられる。

（34）（＝（17））

a. ICON & *pl & *gen >> ICON & *pl & *dat >> ICON & *pl & *acc >> ICON & *pl & *nom
b. ICON & *sg & *gen >> ICON & *sg & *dat >> ICON & *sg & *acc >> ICON & *sg & *nom

（35）

a. ICON & *pl & *gen & *adj >> ICON & *pl & *dat & *adj >> ICON & *pl & *acc & *adj >> ICON & *pl & *nom & *adj
b. ICON & *sg & *gen & *adj >> ICON & *sg & *dat & *adj >> ICON & *sg & *acc & *adj >> ICON & *sg & *nom & *adj

そして，指示／関係代名詞の類像性に関しては，（36）のような制約と優先順位を設定する

ことができ，（33）から，形容詞に関する制約（35）よりも全体的に見て下位に位置することになる。

（36）

a. ICON & *pl & *gen & *pron >> ICON & *pl & *dat & *pron >>
ICON & *pl & *acc & *pron >> ICON & *pl & *nom & *pron

b. ICON & *sg & *gen & *pron >> ICON & *sg & *dat & *pron >>
ICON & *sg & *acc & *pron >> ICON & *sg & *nom & *pron

そうすると，形容詞の場合よりも指示／関係代名詞の場合の方が構造禁止制約の優先度が高くなり，後者の方で“-en”の出現範囲が狭くなるのは当然ということになる。

現代ドイツ語における指示／関係代名詞の“-en”拡張を把握するための優先順位は次のようになる。

（37）

a. ICON & *pl & *gen & *pron >> ICON & *pl & *dat & *pron >> *STRUC >>
ICON & *pl & *acc & *pron >> ICON & *pl & *nom & *pron

b. ICON & *sg & *gen & *pron >> *STRUC & *n >> *STRUC & *f >> *STRUC & *m >>
ICON & *sg & *dat & *pron >> ICON & *sg & *acc & *pron >> ICON & *sg & *nom & *pron

（38）

sg./m./gen.	ICON & *sg & *gen & *pron	*STRUC & *m	*STRUC	*m	ICON	*sg	*gen	*pron
a. des	*!			*	*	*	*	*
b. ☞ dess***en***		*	*	*		*	*	*

（39）

pl./nom.	*STRUC	ICON & *pl & *nom & *pron	ICON	*pl	*nom	*pron
a. ☞ die		*	*	*	*	*
b. die***en***	*!			*	*	*

（40）

pl./dat.	ICON & *pl & *dat & *pron	*STRUC	ICON	*pl	*dat	*pron
a. den	*!		*	*	*	*
b. ☞ den***en***		*		*	*	*

全く拡張のない定冠詞に関しては，類像性制約がさらに下位に位置することになるので，すべての場合で構造禁止制約が勝ってしまうものと考えられる。

以上見てきたように，現代ドイツ語の指示／関係代名詞に現れる拡張語尾“-en”も基本的には形容詞弱変化と同じ機能を担っていると考えられる。その分布が異なっているのは，形容詞と指示／関係代名詞とではその内容的有標性が異なっているためであると考えられ，それを制約の局所結合及び優先順位によって明確に捉えることができるのである。

５．結び

形容詞弱変化における“-e”と“-en”の区別と指示／関係代名詞の拡張語尾“-en”とは，互いに無関係でありかつ無意味なものであると思われがちである。しかしよく観察すると，そこには類像性に基づいた性数格に関する総合的な有標性の具現化を見て取ることができる。そのことは，最適性理論に依拠し，十分に動機付けられた制約とその優先順位を設定することで，より明確となった。さらにこの理論によって，現代ドイツ語と中高ドイツ語との間に存在する形容詞弱変化に関する小さな差異に，ある程度の必然性を見いだすこともできた。形容詞弱変化と指示／関係代名詞との間に見られる“-en”の分布の差異については，形容詞と代名詞の内容的有標性の違いに帰することができた。

本論で取り上げた現象はすべて，単なる歴史的変遷による無意味な副産物ではなく，人間の認知機能のれっきとした反映なのである。

註

１）sing(ular) = 単数，pl(ural) = 複数，m(asculine) = 男性，f(eminine) = 女性，n(euter) = 中性，nom(inative) = 主格（１格），acc(usative) = 対格（４格），dat(ive) = 与格（３格），gen(itive) = 属格（２格）。現代ドイツ語では複数に性の区別は存在しない。また，日本の学習文法では格を数字で呼ぶのが一般的である。数字の割り振りから分かるように，学習文法では主格－属格－与格－対格の順に表記するのが普通であるが，ここでは後で検討する有標性 (markedness) を考慮した配置にしている。

２）３で見るように，中高ドイツ語では女性対格の語尾が“-e”ではなく“-en”となる。それ以外は現代語と同一である。

３）もちろん内容と形式の相関性はあくまでも傾向であり，他の言語では単数形の方が複数形よりも構造的に複雑であるという場合も存在する。ただ，ここでは“-e”か“-en”かという単純な話であるので，通常の傾向に従う可能性が高いと考えられる。

４）一般論として，属格 (genitive) を与格 (dative) よりも上位に配置する階層 (Blake 1994: 89f., 157ff.) も提案されている。しかし，属格には文中おける名詞句の役割を示すという典型的な格の機能だけではなく，他の名詞に直接付加されて所有等を表すという特殊な機能も担っている。そのように見ると属格は特殊であり有標的であるといえる。一方，名詞への付加はありふれた言語機能であるため，一般的な格階層で属格を上位に位置付けることも十分に考えられる。

５）Van Langendonck(2007) も参照。

6）有標性やそれと関連する類像性はその曖昧性のため，Haspelmath(2006, 2008) によってその概念そのものが否定されている。有標性や類像性として捉えられている現象は生起の頻度に帰せられるべきであるという。しかしたとえそうであっても，有標性や類像性は非常に便利な分析ツールであることには変わりがなく，むしろその概念を明確化していくことの方が重要であろう。Bybee(2011), Hume(2011), Wurzel(1998) も参照。

7）行重 (2001) も参照。

8）４で検討する指示／関係代名詞を考慮すると，厳密にはさらに *adjective を組み込んだ ICON & *pl &*gen & *adj >> ICON & *sg & *gen & *adj, ･･･, etc. であると考えられる。

9）Prince & Smolensky(1993: 25 Fn.13) 参照。

10）局所結合に際し，どのような制約どうしが結合可能なのかはしばしば問題になるところである。もし性に関する制約が構造禁止制約ではなく類像性制約と結びつくとすると，ICON & *n >> ICON & *f >> ICON & *m となり，男性に“-en”の現れる格では女性や中性でも“-en”が現れることになってしまう。構造禁止制約と数や格とが結合すると，*STRUC & *pl >> *STRUC & *sg 及び *STRUC & *gen >> *STRUC & *dat >> *STRUC & *acc >> *STRUC & *nom となり，単数形より複数形の方が，有標的な格より無標的な格の方が複雑な構造を持つことが可能となり，一般的な事実と異なってしまう。また，ICON & *pl >> ICON & *sg と *STRUC & *pl >> *STRUC & *sg を同時に設定すると，複数形と単数形がともに複雑あるいは単純な構造を持つこと (ICON & *pl, ICON & *sg >> *STRUC & *pl, *STRUC & *sg あるいは *STRUC & *pl, *STRUC & *sg >> ICON & *pl, ICON & *sg) が可能となるだけではなく，複数形が複雑な構造を持ち単数形が単純な構造を持つこと (ICON & *pl >> *STRUC & *pl かつ *STRUC & *sg >> ICON & *sg) も，その逆 (*STRUC & *pl >> ICON & *pl かつ ICON & *sg >> *STRUC & *sg) も可能となり全く制限がなくなってしまう。前節で見たように，性は実質的内容に乏しく類像性とは関連し難いことから，ICON & *n のような結合制約は形成されないと考えられる。一方，実質的内容のある数や格の有標性と構造そのものを否定する制約とが結び付くと，情報伝達機能を著しく阻害することになると考えられ，*STRUC & *pl や *STRUC & *gen のような結合は起こらないのであろう。ただ，局所結合一般についてどのような制限があるのかについては，十分に解明されていない。音韻論の分野ではいくつかの提案がなされているが，見解は必ずしも一致していないようである。Łubowicz(2005) 及びそこで言及されている文献参照。

11）ここでの目的は，形容詞の弱変化における“-e”と“-en”の分布について明らかにすることであるので，強変化において用いられるような他の語尾については考慮の対象外である。さらに，一般的な類像性は，有標性の度合いに応じて複雑さを段階的に変化させるものである。また，ICONICITY と逆の働きをする *STRUCTURE についても，何らかの音形が存在する限りその複雑さに応じた様々な度合いの違反が存在しているはずである。しかしここで問題になっているのは，“n”の有無のみで，その他の要素に関する ICONICITY / *STRUCTURE の違反及びその段階性は考慮の対象外である。

12）現代ドイツ語に関しては，複数で性の区別が存在しないため，形容詞の弱変化を把握するためには，

ICON & *gen >> ICON & *dat >> *STRUC & *n >> *STRUC & *f >> ICON & *acc >>
*STRUC & *m >> ICON & *nom >> *STRUC

のような数を考慮しない制約と優先順位で十分である。

（ｉ）

sg./n./acc.	*STRUC & *n	ICON & *acc	*STRUC	*n	ICON	*acc
a. ☞ *e*		*		*	*	*
b. *en*	*!		*	*		*

（ii）

pl./acc.	*STRUC & *n	ICON & *acc	*STRUC	*n	ICON	*acc
a. *e*		*!			*	*
b. ☞ *en*			*			*

しかし，次節で見る中高ドイツ語では，複数においても中性が区別されるため，数を考慮した制約が必要である。また，一律に“-en”が現れる形容詞弱変化の複数を把握するためだけであれば，格を考慮しない ICON & *pl で事足りる。しかし，この考え方は，複数においてはすべての格で同一語尾が現れることになり，４で見る指示／関係代名詞に関わる現象の把握を困難にしてしまう。

13）Müller(2002) は，限定詞 (determiner) 及び強変化や混合変化まで含めた付加語的形容詞の変化について包括的に論じているが，動機付けのはっきりしない制約が数多く設定されており，形容詞の弱変化の背景にある意味を見て取ることはできない。

14）中高ドイツ語の複数では，男性と女性の区別は失われるが，中性は維持される。そのため *STRUC & *n は，ICON & *pl & *nom よりも下位でなければならない。またこれにより，ICON & *pl & *nom は，ICON & *sg & *acc よりも上位となる。ところで，中高ドイツ語の複数において，男性／女性の区別が失われ，中性が維持されるが，これは性の有標性と整合しないように思われる。*n >> *f >> *m からすれば，男性と女性が維持され，中性が失われるはずである。現時点で理由は不明であるが，単数で女性であったものが，複数では男性に統合され，さらに中性であったものが複数では女性に移行すると考えることができるかも知れない。そのように考えると複数でいわゆる通性 (common gender) と中性の対立と考えられているものは男性と女性の対立であるということになり，性の有標性と合致することになる。

＜参考文献＞

Bybee, Joan. 2011. Markedness: Iconicity, Economy, and Frequency. In Song, Jae Jung(ed.): 131-147.

Blake, Barry J. 1994. *Case*. Cambridge: Cambridge University Press.

Corbett, Greville G. 2011. Implicational Hierarchies. In Song, Jae Jung(ed.): 190-205.

Geeraerts, Dirk & Hubert Cuyckens(eds.). 2007. *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.

Haspelmath, Martin. 2006. Against Markedness (and What to Replace it with). *Journal of Linguistics* 42: 25–70.

Haspelmath, Martin. 2008. Frequency vs. Iconicity in Explaining Grammatical Asymmetries. *Cognitive Linguistics* 19: 1-33.

Hawkins, John. A. 2011. Processing Efficiency and Complexity in Typological Patterns. In Song, Jae Jung (ed.): 206-226.

Hume, Elizabeth. 2011. Markedness. In Oostendorp, van Marc, Colin J. Ewen, Elizabeth Hume & Keren Rice(eds.): 79-106.

Kager, René. 1999. *Optimality Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kaufmann, Ingrid & Barbara Stiebels(eds.). 2002. *More than Words: A Festschrift for Dieter Wunderlich* (*Studia Grammatica* 53). Berlin: Akademie Verlag.

Łubowicz, Anna. 2005. Locality of Conjunction. *Proceedings of the 24th West Coast Conference on Formal Linguistics*: 254-262. (http://www.lingref.com/cpp/wccfl/24/paper1230.pdf)

Müller, Gereon. 2002. Remarks on Nominal Inflection in German. In Kaufmann, Ingrid & Barbara Stiebels (eds.): 113-145.

Oostendorp, van Marc, Colin J. Ewen, Elizabeth Hume & Keren Rice(eds.). 2011. *The Blackwell Companion to Phonology*. Oxford: Wiley-Blackwell.

Primus, Beatrice. 2011. Case-Marking Typology. In Song, Jae Jung(ed.): 303-321.

Prince, Alan & Paul Smolensky. 1993. *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar. Technical Reports of the Rutgers Center for Cognitive Science* 2. Rutgers University, New Brunswick, NJ.

Rice, Curt. 2006. Optimizing Gender. *Lingua* 116: 1394-1417.

Smolensky, Paul. 1993. Harmony, Markedness, and Phonological Activity. Handout to talk presented at Rutgers Optimality Workshop 1, 23 October 1993, New Brunswick, NJ. (ROA-87)

Smolensky, Paul. 1995. On the Internal Structure of the Constraint Component *Con* of UG. Handout to talk presented at University of California, Los Angeles, 7 April 1995. (ROA-86)

Song, Jae Jung(ed.). 2011. *The Oxford Handbook of Linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press.

Van Langendonck, Willy. 2007. Iconicity. In Geeraerts, Dirk & Hubert Cuyckens(eds.): 394-418.

Wurzel, Wolfgang Ullrich. 1998. On Markedness. *Theoretical Linguistics* 24: 53-71.

古賀允洋．1982. 中高ドイツ語．東京：大学書林.

清水誠．2012. ゲルマン語形容詞強・弱変化の非文法化．歴史言語学 1: 39-71.

行重耕平．2001. 言語構造における有標性の分布．島大言語文化 12: 53-74.

行重耕平．2002. ドイツ語における与格－対格の配列について．島大言語文化 13: 23-39.